【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和７年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	Ａ：十分達成できている Ｂ：おおむね達成できている Ｃ：やや不十分である Ｄ：不十分である

学校名	伊万里市立波多津小学校
1　前年度 評価結果の概要	**・全体的な評価結果として、全ての項目でＡまたはＢの評価となり、一定の成果が上げられたと考える。** **・いじめ問題への対応では、アンケート調査や個人面談、職員連絡会での情報共有などにより早期発見、早期対応に努めることができた。また、集会活動や「すてきカード」の取組、対話活動の充実などを通して、命の尊さや思いやりの心、友達の良さを認めようとする心を育むことができた。** **・地域の「人・もの・こと」を生かした学習活動の充実を図った。コミュニティセンターや地域団体との連携を積極的に行い、地域素材の発掘や地域人材の活用が昨年度以上に活発にできた。また、「はたらく人プロジェクト」の実施により、児童は「働くこと」の意味や意義に気付くとともに、地元のもつ魅力も感じ取っていた。また、県内や地域に暮らす人々とのつながりにも気付くことができた。**
2　学校教育目標	**は：励んで光る　　た：愉しんで光る　　つ：つながって光る**
3　本年度の重点目標	**①　思考力、判断力、表現力の育成を目指した授業の創造を図る。** **②　自他の生命や人権を尊重する心、自尊感情・自己有用感の育成を図る。**

4　重点取組内容・成果指標　　**中間評価**　　**5　最終評価**

（1）共通評価項目

評価項目	取組内容	成果指標（数値目標）	具体的取組	中間評価 進捗度（評価）	中間評価 進捗状況と見通し	最終評価 達成度（評価）	最終評価 実施結果	学校関係者評価 評価	学校関係者評価 意見や提言	主な担当者
●学力の向上	○確かな学力の定着	○既習内容を基に考えた自分の考えを発表し、友達の発言に反応する児童80％以上 下学年：比べながら聞く児童 上学年：相手の意図を考えながら聞く児童 ○学校評価アンケートで「学校の勉強はよくわかる」と回答した児童85％以上	・校内研において「対話活動の充実」を中心においた全体授業研を3回実施する。 ・スキルタイムでは、プリントやAI型ドリル（eライブリ）を活用し、基礎基本の定着を図る。 ・客観的に学習内容の定着がわかるように書く活動において、条件作文や学習用語を使ってまとめたり振り返りを書いたりする活動に取り組む。	A	・対話活動の充実を中心においた全体授業研を1学期中に2回実施することができ、友達の発言に反応する児童は86.2%だった。比べながら聞く児童87.8%（下学年）、相手の意図を考えながら聞く児童84.6%（上学年） ・基礎基本の定着を図るためスキルタイムの見直しを行い、学年に応じて計画的に取り組めるようにした。（条件作文等の実施） ・学校評価アンケート「学校の勉強はよくわかる」と回答した児童は86%だった。	A	・対話活動の充実を中心においた全体授業研を年間3回実施することができ、友達の発言に反応する児童は88%と増加した。 ・基礎基本の定着を図るため、スキルタイムだけでなく教科（国・社・算・理）でAI型ドリルを活用したり、学年に応じた条件作文に取り組んだりした。 ・学校評価アンケート「学校の勉強はよく分かる」と回答した児童94%と中間評価より8%増えた。	A	・成果指標に対して目標を達成し、学力向上につながっています。 ・児童教職員が一体となって取り組む姿勢がうかがえる。児童が授業がよくわかると回答していること素晴らしいと感じました。残りの児童へのフォロー、コミュニケーション力の向上を今後計画的に行ってほしいです。 ・新聞などのメディアで活躍している姿を見ることができました。	研究主任 学力向上コーディネーター
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○学校評価アンケートによる友達に思いやりのある態度や言葉遣いで接することができる児童90％以上	・集会活動（平和集会、人権集会等）、人権週間の取組や、教材の活用等による道徳等の活動での授業実践を通して、自他ともに大切にしようとする心を育む。	A	・平和集会では、高校生平和大使を講師に招き、講話を通して命の尊さについて考えた。 ・アンケートで「友達に思いやりのある態度や言葉遣いで接することができる」と回答した児童90%であった。継続して児童集会や人権集会を実施して豊かな心の育成を目指す。	A	・人権集会では、嬉野高校福祉系列の生徒を講師に招き、認知症の方への理解を深め、他者への思いやりの気持ちを育むことができた。 ・アンケートで「友達に思いやりのある態度や言葉遣いで接することができる」と回答した児童年間90%以上であった。	A	・集会等を通して、児童間での思いやりの気持ちが当たり前のように感じました。いい取組ができていると思いました。 ・小学生のうちからしっかりと考える場を設定し、実践されていると思います。	人権・同和教育担当
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○保護者アンケートの「いじめに対する学校の取組」の評価を90％以上	・こころのアンケート（1回/月）やQ−U（2回/年）を実施するとともに、個別の面談を定期的に行うことで、いじめ等の早期発見、早期対応に努める。 ・教育相談週間（2回/年）を新設し、実施することで、一人ひとりと話をする機会を設ける。 ・職員連絡会で気にしたい子の報告をして共通理解を図って対応する。	A	・いじめアンケート結果（６月）では、いじめを受けていると回答した保護者は０人だった。 ・こころのアンケート（１回／月）を実施し、悩みや不安がある児童に対しては個別に面談を行い、早期対応できている。また、職員連絡会で気したい子への共通理解をしている。 ・Q−U実施後に研修会を行い、学級集団の実態を把握し、具体的な支援を考えることができた。 ・教育相談週間を8・9月に実施し、児童一人ひとりと向き合う時間をつくることができた。事前に教育相談研修会で、SCより話の聴き方等の職員研修をしていただき、相談時に活用できる内容にした。第2回目は、3学期に実施予定。	A	・「わが子はいじめを受けていない」と答えた保護者は97%、「学校が楽しい」と答えた児童は93%だった。 ・こころのアンケート（1回／月）を実施し、悩みや不安がある児童に対しては個別に面談を行い、早期対応できている。1、2年生は回覧、3〜6年生はTeamsで結果の共有をし、児童の様子を把握してもらっている。また、職員連絡会で気したい子への共通理解をしている。 ・Q−Uを年間2回実施し、その都度講師を招いての研修会を行った。結果から、今後の具体的な対応を考えたり、職員間で共有したり、教育相談週間を設けたりすることで、安心して過ごすことができるクラス作りにつながった。	A	・いろいろな方法で教職員間で情報共有していることが素晴らしいです。 ・心身ともにフォローを今後も続けてほしいと思っています。	・教育相談担当 ・生活部主任
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80％以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒90％以上	・職員も「すてきカード」を活用し、児童の良さや頑張りを積極的に見つけ紹介する。 ・行事ごとに振り返りシートを活用し、自尊感情や自己有用感を高めていく。 ・将来に向けての目標を持つために地域との交流活動や社会科見学をしたり、企業などから講師を招聘したり、将来の夢や目標について考えたりする場を設定する。	A	・職員も「すてきカード」を活用し、全校児童に目を向け、良さや頑張りを積極的に見つけることができた。「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童90%だった。 ・行事ごとに感想交流や振り返り活動を行い、自尊感情や自己有用感の高まりにつなげることができた。 ・「浦若会」など地域との交流や社会科見学、「伊万里東洋」の企業見学、教育講演会や芸術鑑賞等で講師を招聘することが	A	・年間を通して、行事や学校生活での児童の良さや頑張りに目を向け、職員もすてきカードに取り組み、意識をして児童を見取ったことによって、「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童は年間を通して90%だった。 ・「自分に良いところがある」と回答した児童83%であった。行事ごとに、感想交流や振り返り活動を行うことで、学年の枠を超えた対話活動を行うことができ、自尊感情や自己有用感が高まった。 ・地域との交流や講師を招聘して教育講演会、芸術鑑賞会、「はたらく人プロジェクト」等の取組により、92%の児童が将来の夢や目標をもっていると回答した。	A	・いろいろなことに興味を持ち、視野を広げるためにも継続してほしいと思います。 ・自分の長所や短所に気づくきっかけもあり、継続してほしいと思っています。 ・先生方の「ステキカード」など大変だと感じたが、児童の自己肯定感の高まりを感じました。	・教務主任 ・文化・特活部主任
●健康・体つくり	●望ましい生活習慣の形成	○平日に毎日朝食を摂取する児童85％以上。 ○早寝早起きについて、自分で立てた目標を達成できた児童85％以上（3回/年程度）。	・生活習慣に関する呼びかけや取り組みを委員会活動で行い、児童自ら健康について考える機会を設ける。 ・給食試食会や栄養教諭との授業などを通して食の大切さについて情報を発信する。 ・教育講演会や保健だより（1回/月程度）、健康教育の授業などを通して、保護者を巻き込んだ取り組みを行う。 ・アンケート等を実施することで、早寝早起きについて児童と保護者で自己目標を立てさせ、定期的に振り返りを行う。	A	・集団下校時に委員会の児童が呼びかけを行った。 ・毎日朝食を摂取する児童は82.5%だった。（6月） ・夏休み後に親子で生活習慣チェック表に取り組んでもらった。早寝・早起きの自己目標を立てて、生活の振り返りをする機会をつくることができた。3学期（冬休み後）にも実施予定。 ・9月の食育授業後に1週間、食事のめあてを決めて取り組んだり、朝ごはんがんばり表でバランスのよい食事ができているか確認したりして、家庭を巻き込んで取り組むことができた。10月には全校対象の食育講話を実施する予定。 ・教育講演会では、睡眠について話をしていただき、親子で睡眠について考える機会になった。	A	早寝・早起きについて、できていると回答した保護者は73%、児童は84%だった。平日に毎日朝食摂取をすると回答した児童は95%となり、朝食を食べてきている児童が増えた。 ・生活習慣チェックを年に2回実施した。（8月、12月）取り組んだ後に振り返りをすることで、もう少し努力しなければいけないところに気付いたり、保護者から気をつけたいことや改善した方がいいこと等を書いてもらったりして、意識づけになった。 ・睡眠についてのアンケートを活用して、学校保健委員会で協議をし、今後の取組について地域・家庭と考える機会となった。 ・栄養教諭と連携し、食育授業、児童・保護者対象の食育講話等を通して、食事の大切さについて考える機会を定期的に設けることができた。各学級でも指導をしたり、ランチルーム前に掲示をしたり、個別での指導を行ったりすることができた。	A	・生活習慣チェックは児童だけでなく、保護者にとって習慣を見直すいい機会となっていると思います。 ・基本的生活習慣について、自分で考えられるようになったらいいと思います。 ・早寝については、保護者と協力しながら進め、い睡眠ができるようになっていく必要があると思います。	・食育推進担当 ・保体部主任
	○目標をもって体力づくりに取り組む教育活動。	○体を動かす遊びをしたり、一輪車の練習をしたりするなど、進んで運動ができる児童90％以上 ○スポーツチャレンジ３種目（ドッジボールラリー、８の字とび、みんなで輪くぐり）のうち、１種目以上に全学年参加する。	・児童自身でなかよしタイムで一輪車や体を動かす遊びを企画し、運動への意欲を高める。 ・一輪車カードや障害物など、活用し昼休みや授業で楽しく活動ができるようにする。 ・健康委員会によるスポーツレクリエーションを全校で行い、運動の機会をつくる。（学期1回） ・県保健課実施のスポーツチャレンジを利用し、積極的に運動に関われるようにする。	A	・運動会前は、一輪車の練習をなかよしタイムや昼休みに取り組んだ。 ・酷暑による運動制限があり、体を動かす遊びをしたり、一輪車の練習をしたりするなど、進んで運動ができる児童は81%だった。 ・健康委員会によるスポーツフェスタは、熱中症対策として時期をずらして9月に実施した。 ・スポーツチャレンジは、5月に全職員に周知し、各学級で取り組んでいる。	A	・定期的に一輪車での活動を計画したり、ジョギングタイムなど実施したりすることで運動の機会を設けた。体を動かす遊びをしたり、一輪車の練習をしたりするなど、進んで運動ができる児童は89%と中間評価より高まった。 ・スポーツチャレンジの実施を全校に呼びかけ、全学年で実施することができた。今年度は、年間計画の中で全校長縄も計画し、縦割り班での記録もすることができた。	A	・元気に外で遊ぶ児童をいると、しっかり体を動かせていると感じる。 ・全校で取り組むことで、児童が楽しんで運動できていると感じる。 ・縦割り班での活動は、児童の社会性や協調性をはぐくむいい取組だと思う。	・保体部主任
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●年間２０日の年次休暇のうち、職員１人当たりの年次休暇の取得日数１４日以上	・勤務時間の管理を行い、超過勤務時間が多い職員については、個別に指導や支援を行う。 ・定時退勤日の徹底、行事や会議の精選・効率化・時間短縮を進める。 ・ICTを活用し、業務の効率化を図る。 ・週末勤務なくすために、業務内容・業務時間を振り返る場を設け、1週間の見通しを持った業務ができるようにする。	A	・時間外勤務時間の上限をほとんどの職員が遵守できた。特定の職員の超過勤務が目立っていたが、管理職からの声掛けや支援を行うことで計画的に業務をこなし、退勤時刻も早くなった。 ・会議資料事前に配付することでを事前に目を通すことができ、会議時間の短縮を図ることができた。 ・年休取得については、昨年度よりも1日以上多くとることを心がけ、長期休業時に取得する職員が増えた。	A	・時間外勤務時間について、その上限（45時間）をほとんどの職員が遵守できた。 ・業務の効率化、ICTの活用、定時退勤日の設定等により、働き方改革への意識の高まりが見られた。「働き方改革を意識し、仕事に優先順位をつけ、効率的に仕事を進めることができた。」とおおむね達成できた職員は100%であった。 ・昨年度よりも取得日数は増えた職員はいるものの、年間14日以上を超える職員は半数以下となった。	A	・数年前を考えるとかなり改善されているように感じました。 ・業務内容を見直し、時間を大切にしてほしいと思います。 ・年次休暇の取得は、リフレッシュの意味で大事だと思う。取得できるよう願っています。	管理職
●特別支援教育の充実	○特別支援教育に関する教員の専門性と意識の向上	○特別支援教育に関する専門性が向上したと回答した教員90％以上	・発達障害児の理解と具体的・実践的な支援について、講師を招聘しての夏季研修会を実施する。 ・支援を要する児童の共通理解を図る。 ・職員の専門性を高めるために、支援ソフトについて研修や通信で啓発することで、利用率90%以上を目指す。	A	・発達障害児の理解と具体的・実践的な支援について夏季研修を実施し、職員全体で事例を通して指導や支援を考えることができた。 ・特別支援教育に関する専門性を、研修等を通して向上させることができたと全職員が回答した。	A	・担任と困り感をもつ児童の情報共有を行い、支援方法についてアドバイスを行った。 ・支援ソフトの活用の仕方について研修を通して、職員全体に周知させることができた。 ・職員アンケートで全職員が特別支援に関する専門性を向上させることができたと回答した。	A	・教職員での共通理解のもと、細やかな支援、指導で児童がのびのびと学校生活を送っていることが分かりました。 ・職員だけでなく、学校関係者の理解も深められるような取組にも期待しています。	特別支援コーディネーター

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

評価項目	重点取組内容	成果指標（数値目標）	具体的取組	中間評価 進捗度（評価）	中間評価 進捗状況と見通し	最終評価 達成度（評価）	最終評価 実施結果	学校関係者評価 評価	学校関係者評価 意見や提言	主な担当者
○地域とともにある学校	○地域の「人・もの・こと」を活用した教育活動の推進	○教科と関連付け、各学年の実態にあわせた地域人材活用 ○地域のよさを知り、地域に誇りや愛着があると感じる児童90％以上	・地域の「ひと・もの・こと」を生かしながら、児童が主体的に地域と関わることができる学習課題の設定を行う。 ・コミュニティセンターや地域団体、各学年学習内容に関連する団体と連携し、「はたらく人プロジェクト」等の活動を通して素材を生かした学習にスムーズに取り組むことのできる環境を整える。	A	・コミュニティセンターや地域団体との連携を行い、地域素材を教科等と関連させた学習を展開することができている。上期では、ほとんどの学年で1回以上の地域人材の活用ができた。 ・児童は地域のよさを感じ取り、アンケートでは94%の児童が「これからもずっと地域の人・もの・ことを大切にしていきたい」と回答した。地域のよいところを言えないという児童が見られるため、下期は地域のよさを見つめさせる学習を展開していきたい。	A	・各学年学習内容に関連する地域団体等と連携したり、「はたらく人プロジェクト」を実施したりして、素材を生かした学習を行うことができた。 ・児童は地域のよさを感じ取り、「これからもずっと地域の人・もの・ことを大切にしていきたい」と回答した児童が94%と高い回答率になっている。地域のよさについて見つめる学習を展開することができたと考える。	A	・児童を中心に、周りから見守る地域と地域に目を向け、地域を大切に思う心が養われていると感じました。 ・児童が地域の良さを感じてくれてよかったです。今後もよろしくお願いいします。	教務主任 総合的な学習の時間主任

●・・・県共通　○・・・学校独自　◎・・・志と誇りを高める教育

5　総合評価・次年度への展望	・指標の設定に際し、具体的な行動や結果の数値目標を設定し、取り組んだ。全体的な評価結果として、全ての項目でA評価となり、一定の成果が上げられたと考える。 ・いじめ問題への対応では、アンケート調査や個人面談、教育相談週間、職員連絡会での情報共有などにより組織的に早期発見、早期対応に努めることができた。また、集会活動や「すてきカード」の取組、対話活動の充実などを通して、自己肯定感の向上や、友達の良さを認めようとする心を育むことができた。 ・地域の「人・もの・こと」を生かした学習活動の充実を図った。地域団体やコミュニティセンターとの連携を積極的に行い、地域ならではの素材の発掘や人材の活用が活発にできた。また「はたらく人プロジェクト」の実施により、児童は将来についての見通しや「働くこと」の意義に気付くとともに、地域の仕事の魅力も感じ取っていた。今後も継続的に取り組み、小学生の時期から進学や就職に対しての選択肢を増やしていくことが重要である。 ・望ましい生活習慣の形成において、学校と家庭、保護者が一体となった取組が重要であり、より強化するためにも育友会とも連携も継続して取組を進めていきたい。